

# 成吉思汗の滿洲經略に關する二三の研究

箭 内 互

緒 言

- 一、耶律留哥傳の紀年の誤謬
- 二、留哥の最初の都は隆安
- 三、萬奴の自立は貞祐三年の春
- 四、萬奴の國號は東眞なるの一考證
- 五、萬奴の遷れたる所謂海島は豆滿江流域なるの明證

## 緒 言

蒙古の滿洲經略は成吉思汗の時、遼東に於ける金の勢力の失墜に乗じて著手せられしものなり。而して遼東に於ける金の勢力の失墜は、其の由來する所違きに在れど、其の近因は、(一)遼東に於ける契丹人耶律留哥の叛亂と、(二)之と關連して金の遼東宣撫使蒲鮮萬奴の自立とに歸するを得べし。余が前年、滿

洲歴史地理第二卷第四篇に於いて東眞國の疆域と題して蒲鮮萬奴の事蹟に關する研究を發表するや、先づ留哥の叛亂を述べ、而して後、萬奴の事に及びしが、其の目的専ら地理の考證に在りしを以て、論じて未だ盡さざるもの多かりき。然るに今春、余輩の接受せる支那の學者屠寄氏の新著蒙兀兒史記を見るに、書中、特に耶律留哥・蒲鮮萬奴列傳と題する一篇を收め、其の所説必ずしも余の所見と一致せず。乃ち本誌の餘白を假りて之を辯じ、更に前説の盡さざりしを補ひ、誤れるを正し、かねて之に關する一二の新研究を附記し、一は以て屠氏の新著を紹介し、一は以て大方の批評を乞はんとす。

### 一 耶律留哥傳の紀年の誤謬

元史の耶律留哥傳は、蒙古の滿洲經營を論ずるもの、必ず先づ精讀すべき絶好史料なり。從來留哥傳を研究せるもの、前に魏源の元史新編あり、後に屠

氏の蒙古元史記あり、元史新編の説に就きては、既に滿洲歴史地理第二卷二四九頁に於いて詳に辯ずる所ありしを以て今復た贅せず。蒙古元史記は最近の著述に係れば、其の研究の精到なる、流石に新編とは同日の談にあらざれども、而も猶ほ遺憾の點少からず。即ち本傳の紀年に誤謬あることを看過したるが如き、其の一例なり。さて本傳の文は以下述ぶる所の各項に互りて參照するの必要あるものなるが故に、煩を忍んで、其の最初の部分を左に載録すべし。

耶律留哥契丹人。仕金爲北邊千戶、太祖起兵朔方、金人疑遠遣民有他志、下令、遼民一戶、以二女眞戶夾居、防之。留哥不自安、歲壬申遁至隆安、韓州、糾壯士剽掠其地、州發卒追捕、留哥皆擊走之。因與耶的合勢、募兵數月、衆至十餘萬、推留哥爲都元帥、耶的副之、營帳百里、威震遼東。太祖命按陳那衍、渾都古、行軍至遼、遇之、問所從來、留哥對曰、我契丹軍也、往附大國、道阻馬疲、故逗遛於此。按陳曰、我奉旨討女眞、適與爾會、庸非天乎、然爾欲效順、何以爲信。留哥乃率所部、會按陳于金山、刑白馬白牛、登高望折矢以盟。按陳曰、吾邀奏、當以征遼之

責、屬爾。金人造胡沙、帥軍六十萬、號百萬、來攻留哥。哥度不能敵、亟馳表聞。帝命按陳、手都歡、阿魯都罕、引千騎會留哥、與金對陳于迪吉腦兒。留哥以姪安奴爲先鋒、橫衝胡沙軍、大敗之、以所俘輜重獻。帝召按陳還、而以可特哥副留哥、屯其地。衆以遼東未定、癸酉三月推留哥爲王。國號遼。甲戌金遣使青狗、誘以重祿使降、不從。青狗度其勢不可、反臣之。金主怒、復遣宣撫萬奴、領軍四十餘萬攻之、留哥逆戰于歸仁縣北河上、金兵大潰、萬奴收散卒、奔東京、安東同知阿憐懼、遣使求附。於是盡有遼東州郡。遼都咸平、號爲中京。金左副元帥移刺都、以兵十萬攻留哥、拒戰敗之。乙亥留哥破東京。

(イ)留哥の離叛。留哥の始めて金に背きて隆安今の長春

府農韓州今の昌圖府安縣韓州八面城附近の間に遁れしは、傳文によれば、壬申の年即ち太祖の七年に在りしが如く見ゆるも、實は決して然らず。何となれば、元史の太祖本紀に「七年壬申春正月耶律留哥聚衆于隆安、自爲都元帥、遣使來附」とあるは、傳文に所謂金山折矢の盟が、壬申正月、若くは其の以前に在りし事を示すものにして、留哥が自ら都元帥と稱せしは、更に其れより以前なるべく、而して耶的と兵を合し、は、又更に

數個月以前の事に係り、而も當時は既に隆安・韓州の地を剽掠し、金兵を走らしめたるものなればなり。之を要するに留哥が始めて叛旗を翻へしたるは、晩くも辛未即ち太祖の六年の春夏の交に在りしや疑なく、本傳に、之をも壬申の年に係けたるは甚しき粗漏といふべきものなり。

(口)迪吉腦兒の戰。迪吉腦兒は迪吉ノールにて、湖名なる事明なれども、未だ之に比定すべきものを得ず、隨て所在不明なるは遺憾なり。此戰は傳文によれば、壬申の歲に起りしが如くに解せらるゝも、之れ亦編者の不注意に基づく誤謬なり。さて傳文に見ゆる胡沙は女真人にして、其の漢名を承裕といへり。金史の承裕傳によれば、彼は元帥右監軍兼咸平府路兵馬都總管となりて留哥と戰ひ敗走せりと見え、完顏弼傳によれば、弼は元帥左監軍となりて遼東を禦ぐの命を受けたりとあれば、此二人は留哥征討のため、元帥となり、左右監軍となりしものなるべし。

説 林

但し右の金史の記事によれば、兩者共に之を以て至寧元年即ち癸酉の年に係け、留哥傳よりは一年後れたり。然らば、元史の紀年と金史の紀年と、其の孰れが正しきやといふに、余は金史に従つて癸酉の年とするを至當なりと信ず。何となれば、(一)承裕傳には「崇慶元年○壬申起爲陝西安撫使。至寧元年遷元帥右監軍兼咸平府路兵馬都總管、與契丹留哥○留哥戰敗績。貞祐初○至寧元年九月貞祐と改元せり、改臨海軍節度使、卒。」とありて、承裕が留哥と戰ひしは、壬申の年にあらずして、癸酉の年、而も貞祐と改元する以前なりしを明示せるものなり。(二)完顏弼傳の記事も亦之と同じく、弼が衛紹王より元帥左監軍として遼東扞禦の命を受けしも、又、王の怒に觸れて遠謫せられしも、共に至寧元年九月以前に在りしことは、其の前後の文面より推定することを得るなり。(三)留哥傳の文面を案ずるに、迪吉腦兒の戰の記事は直に「衆以遼東未定、癸酉三月推留哥爲王云云」の文に接す、之れ此

戰の必ずしも壬申の年内に起りしにはあらずして、寧ろ癸酉の三月より以前に起りしものなる事を暗示するもの、如し。以上述ぶる所果して正鵠を得たりとせば、金史衛紹王本紀に「至寧元年二月詔撫諭遼東」とあるは、蓋し承裕の出征して敗れ歸りし事實を矯飾せしものなるべく、其の下文に「五月改元○崇慶を

矯飾せしものなるべく、其の下文に「五月改元○崇慶を」とあるは、留哥至寧と改元す。詔諭咸平路契丹部人之嘯聚者」とあるは、留哥自立し、其の兵勢の益々振へるを恐れて詔諭せるものと解せらるゝなり。之を要するに迪吉腦兒の戰は癸酉の年而も留哥の自立以前に在りしものと斷定して不可なかるべし。

(ハ)高麗に於ける僞遼國の滅亡。留哥所部の契丹人中、蒙古に降ることを肯んぜずして、丙子の年、即ち太祖の十一年、今の海城に於いて其の酋長を推戴して遼帝と稱せしめたるものは、爾後、連りに蒙古及び金の軍に破られ、遂に高麗に入りて其の國の北半を蹂躪せしが、己卯の春正月、其の根據地なる江東城

陥り、僞遼帝臧舍自殺し、其國亡びし事は、高麗史の記事によりて、一點の疑を容れず。滿洲歴史地理卷二 卷二四二頁參照。然るに留哥傳に之を以て戊寅の年に係けたるは明白なる誤謬なり。

## 二 留哥の最初の都は隆安

屠氏は、蒙兀兒史記の留哥傳に於いて概ね元史の同傳の文を踏襲しながら、留哥の奠都に關しては、

「癸酉三月遂推留哥爲王、國號遼、建元元統、都廣寧。親征錄云、時遼王亦來降、上命爲元帥、屠廣寧。」と記せり。然れども是れ甚しき誤謬なり。何となれば、一屠氏の此斷定は親征

錄の記事より得たるものなること、同氏の明言する所なれども、親征錄には實に「先是、耶律留哥以中國多故、據有東京・咸平等郡、自稱遼王。斫荅・比失兒等遣使詣上行營、納款、又求好於遼王。時遼王亦來降、上命爲元帥、令屠廣寧府」とあるなり。さて留哥が咸平を取りしは甲戌萬奴を破りし後にし

て、東京を占領せしは乙亥再び萬奴を破りし時に在り。而して元史太祖本紀によれば、斫荅等が蒙古に降りしは甲戌六月にして、留哥が蒙古に降りしは乙亥十一月に在るなり。即ち親征録記する所の事件の順序よりいふも、留哥の廣寧に居るに至りしは、乙亥十一月以後の事なり。同書に之を甲戌の條に併せ叙せるは、例の紀年の誤にて従ふべからず、況んや之を以て癸酉の年に係くるが如きは、何等の根據なきものといふべし。(二)留哥は甲戌の年、萬奴の大軍を歸仁縣の北に迎へて之を敗り、萬奴南に走り、安東縣咸平府の屬縣の同知阿憐が降り歸せしに因り、彼は始めて咸平に都するを得しなり。即ち甲戌歸仁縣北の戰爭以前には、咸平は未だ留哥の有にあらざりしなり、何ぞ遽に南して廣寧に都するを得んや。

屠氏は癸酉三月留哥推されて遼王と爲り廣寧に都せる趣を述べて、次に「時、金知廣寧府溫迪罕青狗退守蓋州、妻子陷廣寧。據金史完顏阿里不孫傳金遣青狗、往諭留

哥降、啗以重祿、不從、青狗竟留事之。金主怒、復遣咸平宜撫蒲鮮萬奴來討云」と記す。蓋し屠氏以爲らく、青狗は金の知廣寧府事たり、留哥に襲はれて蓋州に逃れ來りしも、彼の妻子は留哥の手に陥りぬ、今や彼れ金主の命を奉じ、留哥を招致せんとして廣寧に往く、而して留哥從はず、乃ち妻子を棄つるに忍びず、遂に自ら留つて留哥に事へしなりと。

巧なる推測なれど、惜いかな想像に過ぎて、益々事實と遠ざかれり。蓋し、屠氏は青狗が一たび契丹人に降りしを知りて、後之に叛きて金に降りしことを忘れしなり。留哥傳に曰く、「丙子、乞奴・金山・青狗・統古與等、推耶厮不、僭帝號於澄州。國號遼、改元天威、以留哥兄獨刺爲平章、置百官、方閏月、其元帥青狗叛歸于金」と。即ち青狗は丙子の年を以て再び金に降りしなり。因て阿里不孫傳に、「初留哥據廣寧、知廣寧府事溫迪罕青狗居蓋州、妻子留廣寧云」とあるを考ふるに、青狗は丙子の年、契丹の耶厮不に

叛きて金に復歸し、金より廣寧府の知事に任ぜられ居りしに、留哥は成吉思汗の後援を得、蒙古兵數千を率ゐて廣寧に來り、襲うて之を占領し、青狗は妻子を棄て、蓋州に走りしなり。而して青狗の敗走、

留哥の廣寧占領が此年夏秋の交に在りし事は、成吉思汗の留哥に東征を勸めたる語に、「草青馬肥、資爾甲兵。往取家擊」とあるにて推測せらるべきなり。

之を要するに、癸酉三月留哥が都を廣寧に奠めたりとする屠氏の説は斷じて従ひ難し。余は太祖本紀と留哥傳との記事によりて、壬申正月以前、隆安に居を定めてより、甲戌の年萬奴を敗りて咸平に都するまで、彼の根據地は嘗て移動せず、而して彼が廣寧に居りしは丙子の年夏秋の交に始まると斷言するものなり。因にいふ、高麗史高宗世家、丙子三年秋七月の條に、金の東京總管府が高麗の北界兵馬使に與へたる聖旨なるものを録す、其の語誇張の跡歴然たりといへども、中に萬奴が隆安行省移刺に破ら

れたる事に説及せり。移刺は明かに耶律の訛にして耶律留哥を指すものなり。又以て太祖本紀の記事と相補うて留哥が嘗て隆安に居を定めたりし事實を證明するに足るべし。

### 三 萬奴の自立は貞祐三年の春

余は滿洲歷史地理第二卷第三篇東真國の疆域の條に於いて、萬奴が始めて金に叛きて自立したるは、貞祐三年の冬十月に在りとし、之が根據として金史宣宗本紀及び元史太祖本紀の記事を挙げ、之と抵觸する金史紇石烈桓端傳の記事には、其の紀年に誤謬あるものと論じたりしが、其の後、重ねて同傳の記事を研究したるに、曩日の論斷の頗る穩當ならざるを發見せり。然るに、蒙兀兒史記の著者屠氏は、桓端傳の記事の信據すべきを論じ、金史本紀及び元史本紀に、萬奴の自立を此年十月に係くるは誤なりと斷じたり。蒙兀兒史記卷三十五丁 之れ實に正論なり。今其の文を

左に掲げて、謹んで屠氏並に大方に謝す。

按萬奴取咸平、桓端傳但稱貞祐三年、不著月日。然萬奴之師三月已侵婆速、則咸平之取、必在正月、且既取咸平東京潘澄諸州、顯然叛金、不稱僞號、無以煽誘、則僭王改元、必在是時。又按宣紀、貞祐三年冬十月戊戌、遼東宣撫司報敗留哥之捷、所謂敗留哥、卽指咸平事、不稱遼東宣撫鮮萬奴奏敗留哥之捷、而云遼東宣撫司報敗留哥之捷者、非萬奴自報、乃宣撫司他官報也、而本月壬子下閏接書遼東賊蒲鮮萬奴僭號改元天泰矣、戊戌壬子、中間相距僅十五日、史臣據奏報到汴之日先後書之、其實取咸平與僭號改元事、皆在正月、非十月也。舊史太祖紀十年乙亥、冬十月、書金宣撫蒲鮮萬奴據遼東、僭稱天王、國號大真改元天泰、其月分亦沿金史之誤。○滿洲歷史地理第一卷、二三一至二三二頁參照。

萬奴の自立を十月に係くるの非なるは、實に屠氏

の説の如し。然れども、其の他の問題に關する屠氏の見解に就ては、未だ必ずしも從ひ難きものあり。

桓端傳に曰く、「貞祐三年蒲鮮萬奴取咸平東京潘澄諸州、及猛安謀克人亦多從之者。三月萬奴步騎九千侵婆速近境云」と。屠氏は此文に據りて、此年正月に萬奴は留哥を敗りて咸平等を取りしものにて、金史宣宗紀に「十月戊戌遼東宣撫司報敗留哥之捷」とあるは、此事の報告が十月に至りて汴京の金廷に到著したるものと解釋せり。余は此解釋を否認せんとす。何となれば、(一)萬奴は既に前年夏の頃より東京に居たりしこと明なれば、彼が此年の初に東京を占領することあるべからず。(二)澄州は今の海城にて、東京即ち遼陽の南に在り。若し萬奴にして此時始めて之を取れりとせば、そは金より取りしものにて、留哥より取りしにはあらず、蓋し留哥は固より未だ此地方一指をも染め得ざりしものなればなり。(三)瀋州は今の奉天なり。之れ或は前年末又は此年の初に留

哥に奪はれしを回復せしものと想像せられざるにあ  
らねど、それ唯想像のみ。何等之を断定すべき證據  
なし。(四)咸平は今の開原なり。此年の初、咸平が萬  
奴の有に歸せりといふに至つては、更に疑ふべし。

萬奴が宣撫使に任ぜられしこと、果して親征録の言  
ふが如く、宣宗の南遷貞祐二年五月以後に在りきとせば、歸  
仁縣の戰、萬奴の敗走は同年の夏か秋なるべく、留哥  
の咸平占領及び奠都は早くも其の秋なるべく、移刺  
都の大敗は秋冬の交なるべし。かくて貞祐二年末に  
於ける留哥の軍容は日に益々振ひたりしなり。此時  
に當りて萬奴果して咸平を回復するを得たりとせ  
ば、留哥にとりては非常の大失敗なりきと同時に、萬  
奴にとりては非常の大成功なりきと言はざるべから  
ず。又想ふに咸平一たび萬奴に没せば、留哥は必ず退  
いて再び韓州方面に據らざるべからず、而して此の  
如きは留哥にとりては實に運命の一大逆轉なり、而  
も元史の編者は其の留哥傳に於いて嘗て之に説及せ

ず、却て翌三年には更に進んで東京を占領して萬奴  
を逐へるをいふを見る。留哥は實に勢に乗じて南下  
したるなり。之を要するに、貞祐三年正月若くは二月  
に於いて萬奴が留哥を破つて咸平を占領せりとする  
屠氏の見解は全然穩當を缺ける者なり。然らば桓端  
傳に見ゆる最初の一句は如何に之を解釋すべきか。

一面より見れば、編者は同年二月以前の萬奴の勢力  
を概説せんとして、冒頭に此一句を置きしものなれ  
ど、而も、留哥との對抗に關する智識の皆無若くは  
不完全なりしがために、咸平の如きも已に萬奴の有  
たりしが如くに記載せしなりとも解するを得べし。  
然れども此見解は未だ穩當ならず、余は之を以て下  
の如く解釋せんとす、曰く、此一句は、貞祐三年三  
月萬奴が婆速地方の侵略に著手する以前、東京に據  
りて自立し、其の附近の州縣を招致せる結果、北は  
涿州より南は澄州に至るまで皆萬奴に降り、此地方



の猛安謀克も亦多く之に従へりとの事實を傳へたるものにして、咸平も同時に萬奴の有に歸せりとしたるは編者の誤解なり、而して諸州縣の降附は決して留哥の敗戦を意味するものにあらずと。故に屠氏が萬奴の咸平占領を以て事實とし、殊に之を三年正月に係けたるは臆斷なり。余は屠氏が桓端傳の記事を信用し、之に由て萬奴の自立は十月にあらずと論證したるの點に於いて其の卓見に敬服すれども、而も同氏が之を以て正月に在りさと斷定するに至つては所謂過ぎたるは及ばざるが如しの感なき能はず、こは寧ろ同年の春、萬奴の婆速地方出征以前と推定すべきものなり。

屠氏、又、遼東宣撫司の報告を以て、此年正月咸平を占領せる事實を指すものと解すれども、咸平等の諸城を留哥より奪回せりとの同氏の推測が、何等根據なきものと決定したる以上、此説も自然に消滅せざるべからず。然らば金史に見えたる此記事は

如何に解釋せらるべきかといふに、余は之を以て萬奴等が宣撫司の名を以て發したる虚偽の報告なるべしと想像す。蓋し萬奴は之によりて一面には金廷をして遼東に對する懸念を除去せしめ、他面に於ては遼陽以南及び以東の經路に従事するの餘裕を得、自家の立脚地を堅めんとしたるものなるべし。

#### 四 萬奴の國號は東眞なる の一旁證

萬奴の國號に就いては元史の紀傳均しく之を東夏と記するも、夏は眞の誤にて、當に東眞に作るべきものなる事は、余の曩に滿洲歴史地理に於いて詳論したる所なり。其の後、洪鈞の元史譯文證補を檢索して、更に一旁證を得たり。左に之を述べて以て卑見を確むべし。同書卷一下に曰く、「金主之南遷也、以秃珠大石爲宣撫、錄云以招討也奴爲咸平等路宣撫、復移於忽必阿爾此無地名而人名大異殆誤、然所記之事則一事也。或於金主前、言其有異志、秃珠大石疑懼、遂來降、

更遣子鐵克爲質、給事於御營。既而復叛、自立爲東夏王。原作東京、據錄改正。と、茲に禿珠大石とあるは親征錄に也奴とあると異名同人なること、兩書の記事を對照するもの、均しく首肯する所、而して也奴は一に爲奴に作られ、證補には幹奴に作りたれども、孰れも萬奴と同音異譯なること、嘗て詳かに論證する所ありしが、尙ほ元史太祖本紀に萬奴の子を帖哥とし、金史溫迪罕老兒傳及び親征錄に鐵哥とし、證補に鐵克とするを以て、之を考ふるに、證補に所謂禿珠大石は斷じて萬奴の異名なり。是に於いて問題は萬奴の稱したる國號の事に移るべし。證補の著者洪鈞は、原書に東京王とあれど、親征錄に據りて東夏王と改正すと注すること、右の引用文に見る所の如し。さて洪氏は萬奴の國號が東夏なりとする親征錄及び元史の記事に就いて嘗て疑を挾まざりしが故に、漫然として之を改めしのみ。然れども東夏は東眞の誤なるべきこと、果して卑見の如しとせば、洪氏の重譯せ

る原書、即ちベレンジンの譯のラシッドの集史には東京に相當する音字を以て、萬奴の建てたる國號と爲ししなり。余は未だベレンジンの譯本を見るの機會を得ざれば、洪氏の所謂東京の二字が果して原音を正寫したるや否やを知ること能はずといへども、察するに原音は當に Tung-ching 若くは Tung-chin なるべし。果して然らば、洪氏が之に充つるに東京の二字を以てしたるは必ずしも當らず、余は、曩に論ずる所によりて萬奴の國號を東眞なりと信ずる以上は、ベレンジン譯本にも、ラシッド原本にも、實に東眞 (Tung-chin) の二字を現はすべき文字を用ゐたりしものと推測せざるを得ず。換言すれば、ラシッド原文にも、ベレンジン譯文にも、東眞とありしを、洪氏は全く東眞に關する事實を知らざりしがため、之を以て東京の音譯と誤解し、更に親征錄元史等に東夏とあるにより、漫然之を東夏と改めしに過ぎざるべし。

高麗朝鮮二朝の文集として有名なる東文選卷六十  
一に、俞升旦の撰に係る「回東夏國書なるもの二通  
を收む。其の一には「高麗國王某謹廻書于東夏國王殿  
下、承來云云、成吉思皇帝聖旨道、與東夏國準備親  
見來者、高麗國依前一詿約和時分、亦一同將來爲比  
準備前去」云とありて東夏の國號再見し、且つ題に  
も東夏とあり。其二には、「同前書」と題し」<sup>上</sup>兩國  
自疆界、貴國所領東真防卒、留於東真境內、不令寸  
步入我疆界、<sup>云</sup>とありて、茲には、東真といひて東  
夏といはず。又別に李奎報の作なる「答東真別紙」と  
題する一章を收めたり。以上、東文選收むる所のもの  
のみに就いて考ふる時は、東真是東女眞の略稱にて、  
高麗人慣用の地方名なれども、萬奴の定めたる國號  
は東夏なるべしとの疑あらんも、必ずしも然らず。  
東夏の文字の見ゆるは、單に最初の一通に過ぎざれ  
ば、傳寫若くは版刻の際に起れる誤謬とも言ふを得  
べし。高麗史には皆東真國とありて、絶えて東夏國

といはざるは、右に對する何よりの反證なり。人或  
は、東夏は華夏又は中夏に對して東方の文明國の義  
に解して、此國號を是認するも可ならずやと言はん  
も、萬奴の國は其文化に於いて何等他に誇るに足る  
べきものあらざりき。隨つて此想像は容易に成立せ  
ず。又西夏に對しての東夏と解する能はざるかとの  
反問起らんも、西夏は、もと夏州の名より得たる國  
名にて、中夏の夏にはあらず。且つ其の種族はタン  
グートにて。甘肅方面に居れり、東陞の女真人とは  
素より何等の關係なし、何ぞ之に對する國號を擇ぶ  
の道理あらんや。

之を要するに、(一)高麗史には皆東真又は東真國と  
記して絶えて東夏と稱せざる事、(二)萬奴の始めて東  
京に自立せる時の國號が大真なりしこと、(三)眞の字  
は夏の字に誤られ易き事、(四)ラシッドの集史の原文  
には東真とありしものと推測せらるゝ事、(五)東夏は  
萬奴の國號としては不穩當なる事、以上五個條の理



路に到着して之に據りしは必ずしも同年内ならずして、寧ろ翌年若くは翌々年に在りしを疑はず。今萬奴の再度の自立以後の行動を見るに、彼は十二年の春、兵を遣はして金の上京を攻め、上京行省太平に迎へられ、内外相應じて遂に上京を陥れ、元帥承充を虜にし、同知上京留守事溫迪罕老兒も亦萬奴の子鐵哥に執へられて遂に殺されしが、幾もなくして萬奴の兵は大敗して上京は再び金軍の有に歸し、此年四月には蒲察五斤と云ふもの、上京行省に任ぜられ、少くとも一年以上其の職に在しりこと、金史紀傳の文によりて明なり。又、高麗史高宗世家の條によるに、此年四月萬奴の兵來りて大夫營を破るとあり、大夫營は鴨綠江下流の沿岸にて、九連城・義州等と接邇せる地なり。金史完顏阿里不孫傳に「是時蒲鮮萬奴據遼東、侵掠婆速之境、高麗畏其強、助糧八萬石」とあるも亦萬奴が鴨綠江邊を侵攻せるを示すものにして、蓋し前述せる高麗史の記事と同一事實をいふ

に外ならず、婆速は城名としては今の九連城を指し、路名としては、同城附近一帶の地方を指す。たゞ此時萬奴が遼東に據れりとするは、遼東の地名を廣義に解せんには兎に角、然らずんば、編者の疎漏なり。然れども、十二年の夏頃萬奴の兵が鴨綠江の下流域に出沒せる事、稍解し難きに似たれば、或は之を以て此地方の無頼の女真人が萬奴の名を假りて劫掠を縦にせしものかとも思はるれど、又強ちに此事實の必無を斷じ難し。若し事實とせば、萬奴の曷懶路に移るの途次、一軍を分遣して侵掠せしめしものなるべく、果して然らば、彼の東遷の通路は今の開原より輝發河流域に出て、更に東行して間島に至るものなるべし。此通路は元明時代に於ける滿洲交通路中有名なるもの、一たりしことは、余の嘗て考證せる所なり。滿洲歷史地理第二卷第六編參照二ついて萬奴の行動として著はるゝものは、彼が蒙古と連合して高麗に於ける契丹人を掃蕩せる事なり、而して此連合軍は、十三年秋

冬の交を以て今の咸鏡道南部に現はれたり。是に於いて余は萬奴の東遷の完了、即ち曷懶路の占領を以て、十二年の春より十三年秋冬の交に至る間に在りしものと推定す、而して其の期間を更に限局するに資すべき史料なきを遺憾とす。

然るに屠氏の蒲鮮萬奴傳に曰く、「冬十月來降、以其子帖哥入質、既而殺蒙兀所置遼東行省右丞耶律捏兒哥、復叛去、帥衆十萬、棲遁海島。丁丑四月登陸、破金兵於大夫營、○注略轉入女真故地、此語出高麗史。上京地、即萬奴所開元也。自稱東夏國、高麗史作東真、涉前大真而并呼之也、然耶律留哥舊傳稱東夏。改金上京會寧府曰開元、都之、○注略別置南京、○注略仍

羈屬蒙兀、云と。屠氏は海島を以て文字のまゝに解し、黄海の某島を以て之に擬せしものなり、而して又高麗史の記事によりて「四月登陸、云」と推定せり。説を立つること巧なれども、是れ全く誤解なり。試に思へ、黄海中、果して十萬の大軍が四五月の久しき間潜伏するを得べき島ありや。梁持勝傳に

よれば、萬奴は當時、咸平即ち今の開原に居りしなり、而して彼は曷懶路に走らんとし遂に其の目的を達せしなり。興定元年の春、上京を攻めたりし事實も亦彼れの遼東北部に居りしことを證するにあらざや。乃ち萬奴は決して先づ黄海中の某島に入り、

丁丑四月鳴綠江口より大夫營に上陸し、而して後、開元に據りしにあらざして、咸平より直に東に向つて金の曷懶路、即ち元の開元路の東南部に入りしなり。元史の王榮祖傳に所謂開元は、元の開元路をいふものにて、勿論金の上京にはあらず、元初の開元城にもあらず、開元城は今の依蘭府三姓なり。屠氏の開元路及び開元城に關する説皆誤れり。委しくは滿洲歷史地理

第二卷第三篇及び第四篇參照

大正三年五月十日稿